



染められてしまった嫁
気づかなかつた僕。

INDEX

- 第一話 :: 萌夏の変化 :: あなた視点..... 2
- 第二話 :: 九月 セクハラの季節 :: 金田視点..... 31
- 第三話 :: 十二月 調教の季節 (1) :: 金田視点..... 42
- 第四話 :: 十二月 調教の季節 (11) :: 金田視点..... 54
- 第五話 :: 三月 教育の季節 (1) 金田視点..... 66
- 第六話 :: 三月 教育の季節 (2) :: 金田視点..... 78

Character

☆桑原萌夏（くわはら ほのか）

二十二歳（新卒）：168cm
真面目でさばさばしているけれども、同じく真面目な主人公のことを慕っている。犬タイプのヒロイン。主人公の近所に住んでいた縁で慕っている。高校・大学と2つ年下の主人公と後輩としてずっと追いかけてきた。



☆あなた（視聴者）

二十四歳（入社2年目）：170cm

就活に失敗し、志望していなかつた成功したベンチャー系企業に入るも、過労働の中に自分の居場所を見出す。少しでも成功するために、進んでサービス残業し、そのことを金田に見透かされている。

☆金田（ヒロインとあなたの会社の嫌な社長）

三十五歳：175cm

遊び慣れていて世渡り上手、成金。主人公からは真面目じやないと思われている。口だけ意識高い系。人を利用するのはうまく、こするい。

第一話・萌夏の変化　..あなた視点

六月

僕が彼女に出会ったのはずつと小さなときだった。2つとなりに引っ越してきた小さな女の子。小学生の僕は無邪気な好奇心から彼女に声をかけ、近所を案内した。しばらくして彼女は僕が通っていたそろばん教室に通うようになつて、一緒に帰ることが増えた。

思春期になつてお互いのことを意識してわざと無視し合つたりしたこともあつた。それでも僕たちはお互いのことを完全に無視することができなかつた。だって、彼女は僕のいる高校を選んでいたから。1歳年下の彼女にとって一緒に通える期間はたつた1年でしかないというのに。でもだからこそ、僕たちはお互いのことを意識して、いつの間にかほんとうの意味で愛しく思い合うようになつていた。その1年が性を恥ずかしがる僕達の気持ちよりもずっとずっと愛おしかつたから。

そして僕は東京の大学に入り、彼女は僕を追いかけて東京の大学に入ってきた。芯が強くて優等生タイプなのに僕と一人の時だけは甘えてくれる優しい彼女。僕の大学に彼女が進学してきた日、入学式の直後、僕は彼女に告白した。長い長い恋愛の真似事を繰り返した後で、ぼくと萌夏は本当に彼氏と彼女にかつた。それでも僕達にあった時間はほんの2年間だけ、2年後に僕は就職した。第一希望の企業じやなかつたし、第二希望でも、第三希望でもなかつた。落ち込んだ僕の肩を抱いて優しく慰めてくれた彼女。『あなたがいくところだつたらどこだつて私は行くわ』そう、たしかに彼女はささやいて僕を元気づけてくれた。僕たちはその時から同棲し始めた。

だから、僕は頑張つて働いた。彼女に恥ずかしくない男であるために。彼女が大学を卒業して同じ会社で働くときにはきちんと教えられるように。正直に言つて僕は自分の会社があまり好きではなかつた。誰も彼も不真面目で口だけで、隙があれば人に仕事を押し付けようとする。そんな会社を新人の僕が変えることはできないけれど、せめて先頭に立つて

背中で模範を見せて示すことはできると思った。だから僕はサービス残業もためらわずに受け入れた。全部愛する萌夏のために。

彼女が入社してくれば、すぐに結婚の話が出るだろう。結婚して、所帯を持ってきちんと男の責任を果たせるように準備しないと。そう思つて僕は働いてお金を貯めた。

彼女が会社に面接に来た日。朝家を出る時にお互い肩を叩き合つて頑張ろうと言つた。彼女と僕の揺るぎない絆を感じて、そして優秀な彼女なら絶対にあんな会社を落ちることはないと確信しながら。

結果として当然のように彼女が就職した。彼女の配属された部署は僕の部署とはあんまり関係がなくて昼食の時ぐらいしか会えなかつたけれども僕たちは幸せだつた。

そして6月。久しぶりに一緒に出かけた。久しぶりの連休に僕たちは実家に帰つて家の近所の公園で僕はプレゼントした。小学校の時に一緒に遊んだ公園だ。渡したのは精巧なイミテーションジユエリーの指輪と封筒。今はこれだけだけど、落ち着いたら本物のダイヤのエンゲージ

リングを用意して結婚式をあげよう。そう僕は言つた。渡した封筒には
いつていたのは記入済みで彼女が署名するだけの結婚届。

そして僕たちは夫婦になつた。会社でのトラブルを避けるために社
内では別姓のままで通した。なんといっても彼女はまだ入つて数ヶ月の
新入社員なのだから余計な苦労はかけたくないなかつた。

七月

季節がすぎて夏が終わる。僕も彼女も真面目だつたから朝早く家を出
て、夜遅く帰つた。忙しい日々に埋もれながらもなんとか時間を作つて
たまの休みには二人でちよつとしたデートにも行つた。一緒に昼食を食
べて一緒に通勤する幸せで穏やかな日々。

けれども、徐々に彼女の帰宅する時間が秋の初め頃からずれ始めた。
まず、会社の営業などで取引先と食事にいかなければいけないことが増
え、それはすぐに週末も侵食した。彼女の帰宅はいつの間にか日付をま
たいで酒臭い息をしながら帰つてくるのが普通になつた。

そして彼女は秘書課に転属になった。給料は上がったし、昇進と言つてもいいと思う。祝福して近所の居酒屋で乾杯した。彼女の表情はどことなく浮かなかつたのは理解できた。社長の金田はどう考へても最低のやつだったからだ。たしかに僕達の働く会社を立ち上げたのは金田だ。だけどその時には資本金を用意した共同経営者がいたのだった。実際にはその共同経営者のノウハウと資本をつかつて業務を拡大し、そして自分の息のかかつた人間を大量に雇用して会社を乗つ取つたらしい。そしてそれとともに社名を金田コーポレーションとして全てを支配したという。

だが、金田のやつていることは人に業務の大半を押し付け失敗したら切り捨てるという過酷なやり方で、この方法なら金田本人は責任を取る必要のない卑怯な経営だ。しかも、僕が一番嫌いなのはカタカナ語を多用し大言壯語を撒き散らすくせに残業する人間を無能と見下す態度だ。だからそんなやつのそばに萌夏が行くことは気持ちのいいことじゃなかつたし、不安だつた。それでも優秀で芯の強い彼女なら大丈夫だと

思っていた。ただ、今まで以上に一緒にいる時間が減ってしまうのだけが怖かった。

そして密かに僕よりも早く昇進した彼女への羨望と男としての自信喪失が伴つたことも言つておかなければいけないと思う。彼女との関係をフェアなものであり続けるために。

案の定、僕と彼女の会える時間は著しく減つた。彼女は会社ではなく社長の自宅に迎えに行くことになつて一緒に通勤できなくなつた。そして昼食も金田のランチミーティングのために一緒に取れなくなつてしまつた。10月に入つた頃から一緒の家で暮らしているはずなのに顔を見るのも珍しくなつてしまつた。実際、萌夏は社長に付き合つてあちこちに出張していたし、そうでなくとも残業で会社の近くのビジネスホテルに泊まる事が増えていた。会社で時たま見かける彼女はいつも忙しそうで、声がかけづらかつた。

僕たちは夫婦なのにまるで他人みたいな生活が始まった。まるで高校時代みたいにコミュニケーションの中心はメールだけで、しかもそれ

さえもお互い忙しすぎてまるで業務連絡みたいな簡潔なものになつてしまつた。これじやあゆつくりとチャットで時間を共有できた高校時代の疑似恋愛以下だ。

十一月になつて初めて夫婦の営みを萌夏に拒否されてしまつた。彼女が忙しいことは知つていたから『疲れているからやめて、おねがい』と言われたときは仕方がないと諦めるしかなかつた。今年のクリスマスは一緒に過ごすことができなさうだなと寂しく思つた。

冬が来た。高校から今まで冬がこんなに寒いと思つたことはなかつた。いつも萌夏とつながつていると感じられたから。一人じゃないと感じられたから。でも今は夫婦として籍を一緒に入れているはずなのにそう感じられない。はじめは休み時間の度にやり取りしていたメールのやり取りさえいつの間にか半日に一通になつて、一日一通になつて、そして最近は数日置きになつてしまつていて。しかも年末年始は金田社長の海外展開の事前調査に付き合つて海外出張が入つてしまつたから一緒に実家に帰れないと言われてしまつた。

十二月

そして年が明ける。一緒に実家に帰つてお雑煮を食べて、お屠蘇を飲んで、夫婦になつた最初の正月を祝いたかつた。それなのに萌夏はいくつも完全にやる気を失つた僕は寝正月を過ごした。彼女が横にいない正月なんて1年ぶりだった。

そんな正月のある日、僕達の共通の知人と話していた。その知人は萌夏が新しい会社に入つて随分垢抜けたみたいだねと話していた。そんなはずがないと僕が言うとそいつは僕の知らない彼女の SNS アカウントを紹介してくれた。忙しい彼女に SNS を更新する余裕などあるはずがない、だから彼女の殆どの SNS はこの半年間止まつたままだった。

それなのにその SNS は頻繁に更新されていて、しかもおよそ彼女らしくない雰囲気を醸し出していた。僕はその知人に同姓同名の知人だろと言つて一笑に付したが、内心では気が気でなかつた。

そのアカウントは名前と会社以外の情報は全部伏せられていて、萌夏

だという確信は持てなかつた。それでも萌夏でないという確信も持てなかつた。気がつくと僕はそのアカウントに頻繁にアクセスしていた。たぶんあんまりにも長い間、萌夏ときちんと喋れていなかつたから気の迷いだらう。

その SNS はごく最近開設されたもので履歴を遡っていくと 5 月に作られたものだとわかつた。

最初に思つたのは多分これは同姓同名の誰か別の人間の SNS だということだった。なぜなら、あまりのも普段の彼女の真面目な雰囲気とはかけ離れていたし、なんだか不まじめな臭がしたからだ。それなのに僕達の会社に言及されていて余計に困惑した。

Sep. 20, 20XX 🎂

金田コーポレーションの桑原です。

今日からフェスチャはじめました。

いっぱい勉強しなきゃいけないけど、頑張ります👍！

今日は秘書課のみんなで転任祝いのランチを頂いちゃいました🍝🍴！



Like 👍 Comment 💬

👉 ❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 40 others

Kaneda

フェスチャはビジネス関係のヒューマネに必須だから、早く使い方を覚えてね。

オレのフォロワーをフォローするとイイ感じだと思うから、

ヨロシク！

Like • Reply

Shimoda

萌夏ちゃん、よろしくお願ひします！一緒に会社を盛り上げよ～！

そして読み進めていくとこの人物はあまり真面目に仕事をしている
ように見えないと感じてしまう。昼間つから社外でお茶をしたり、まる
で学生気分が抜け切れていないのに大人を気取っているようなアンバ
ランスな印象を受けて気分が悪くなる。それなのに、オレはそれを見る
のを止めることができなかつた。

Honoka Kuwahara sent from Shibuya

Oct. 14. 20XX

今日は渋谷のカフェ🍎でお仕事の続きをしています。

近く誰かいましたら一緒にプレゼン準備手伝ってくれると嬉しいかもで❤️



Like Comment

❤️ Kaneda, Sato, Suzuki and 38 others

Kaneda

お疲れ様です。

オレもそっちのほうにいるのでお手伝いしに行きますね。萌夏ちゃん

なら大丈夫です▶

[Like](#) • [Reply](#)

Shimoda

金田社長と一緒に手伝いに行きますね！

ほぼ数日置きに自分の人生がいかに素晴らしいものかを誇示するかのように投稿されている写真の数々。でも、どの投稿もこの手の意識高い系の人間にありがちなコメントで埋められていて萌夏の個性がどこにも見当たらない。そもそも彼女はこんなふうに投稿するタイプの人間ではないはずなのだけど。

Honoka Kuwahara sent from Ginza

Oct. 21 . 20XX



似合ってるかな？ちょっと不安かもです。

でも社長さんに頑張ってるからってプレゼント▼されちゃったから皆さんに報告しないって思って(笑)
この前の案件のご褒美みたいです😊

その節はいろいろとご迷惑をかけちゃいましたがなんとか成功させられました！ありがとうございます😊



Like Comment

Kaneda, Sato, Suzuki and others

Kaneda

似合つてるとよ。気に入ってくれたみたいで良かった。

とりあえずは、お疲れ！これからることは次のミーティングのアジェンダにするから楽しみにしててよ

Like • Reply

Shimoda

アレのことは気にしないで。大丈夫私達みんなでサポートするから！

そしていつの頃からかその SNS に投稿される文面には単なるビジネスや仕事を超えた人間関係、それも男の匂いがし始めていた。萌夏のことではないと頭では理解しているのだが、その投稿の一つ一つが僕の感情を刺激して疑念を深めていく。自分の妻を、それも正月さえ働いている一生懸命で真面目な妻を信じなければいけないという気持ちが、こんなどこの誰ともわからない安っぽい赤の他人の投稿で揺らいでいいはずがないのに…。

Honoka Kuwahara sent from Yoyogi

Oct. 31. 20XX

今日は金田社長さんと一緒にアジアンなランチをいただきました🍴
スパイシーだったけど、とっても刺激的でした❤
別のカルチャーにふれるのってクリエイティブセンスを刺激されて嬉しい体験でした！



Like Comment

❤ Kaneda, Sato, Suzuki and 40 others

Kaneda

おいしかった？

次のプロジェクトのためのインスピレーションが得られたらいいね。

また食事に行きましょう

Like • Reply

苛立たしいほどに不自然なカタカナ語のオンパレード。それが彼女を浮ついた表層的な人間だと見せつけてくる。僕が苦手ないタイプの口だけの無個性で不真面目なタイプ。それなのに彼女の人生は誇示するためだとわかっているにも関わらず、楽しそうで、そして所々にそこはかといい不実さを感じられた。

Honoka Kuwahara sent from Izu

Nov. 3. 20XX

今日は日曜日ですが、取引先のMさんに誘われて社長さんと一緒にゴルフを楽しませてもらいましたよ。楽しかったです。
ちょっとゴルフウェアは肌寒かったけど、久しぶりに体を動かして、
すごいリフレッシュできました。



Like Comment

Kaneda, Sato, Suzuki and 23 others

Kaneda

萌夏ちゃんのゴルフウェア可愛かったよ。汗を流したあの飲み会も
楽しかったしね。また行こう！

Like • Reply

Shimoda

途中で雨が降って服が透けちゃったときはハラハラしたけど、楽しか

これは絶対萌夏ではない。僕の知っている彼女はこんな浮ついて不真面目で表層的な人間ではない。今もきっと仕事を頑張っているに違ひがない。それなのに心のなかではぼくは彼女のことを完全に信じきれなくなりつつあつた。たった数十枚のSNSの投稿、ソレが僕と彼女の絆を揺るがせてしまう。それほどまでにこの半年の忙しさは僕と彼女を切り離してしまつっていた。

Nov. 20 . 20XX 

いつもお世話になっている取引先のS部長にピアス頂いた
ました ❤

こんなプレゼント🎁びっくりです。赤くてすごくかわいくて嬉しいの
でここで報告させてもらいます。

それからもちろん、S部長さん、ありがとうございます！ ❤



Like  Comment 

 ❤ Kaneda, Sato, Suzuki and 18 others

Kaneda

よかったです。オレも萌夏がベターなリレーションシップをS部長と作
ってくれて嬉しいよ！その調子で愛想よく、キミのキャラクターを活かして
ね

Like • Reply

Shimoda

S部長ってウチの業界の大物だよ！

その僕の知らない萌夏という人物の投稿頻度は徐々に増えていって、投稿すればするほど反響も増えていっている気がした。あちこちからプレゼントも受け取つてゐるらしく、初めは仕事のことが中心だった投稿は少しづつ化粧やファッショングなど女性らしい方向にシフトしていくよう見えた。それなのに、彼女の投稿につくコメントの大半が男からのもので、彼女の交友関係がどんなに歪んでいるものなのかを察せられた。

Dec. 24. 20XX



メリー・クリスマス



金田さんがあげちゃえって言うから特別にあげます。金田さんエッチすぎですよ～、でもクリスマスだしみなさんもお楽しみなんですよね



今日は朝から大忙しでした(笑)



Like



Comment



Like



Kaneda, Sato, Suzuki and 153 others

Kaneda

プレゼントしたブラめちゃくちゃセクシーでキュートじゃん。オレのクリスマスプレゼントもちろんと発表しなきやね。あとで萌夏のくれたネクタイピンつけてみるから楽しみにしててな



Like • Reply

Shimoda

もー金田さんったら。あんまり萌夏ちゃんにむちゅぶりしちゃ

そしてクリスマス。僕が残業して、萌夏もやはり忙しくてそんなイベ
ントどころではなかつた日。妻と同姓同名の彼女は別お意味で忙しかつ
たのだとまるで見せつけるように上司から与えられた下着の写真をア
ップロードしていた。僕は一昨年のクリスマスに彼女から貰つたネクタ
イピンを思わず思い出した。

Honoka Kuwahara sent from Jeju Island

Jan. 01. 20XX

秘書課のみなさんと金田社長さんと一緒に日の出☀です。

この1年、すごく成長できた気がします。ほんとうに皆様ありがとうございます。

新しい年🎍も皆様にかわいがってもらえるとうれしいです❤



Like Comment

❤ Kaneda, Sato, Suzuki and 33 others

Kaneda

萌夏ちゃんの成長にコミットできてオレも嬉しいよ。

後でみんな一緒に特別セミナーがあるから期待していいよ❤

Like • Reply

Shimoda

萌夏もすっかり私達の会社の色に染まったよね。これからも

そしてこのSNSの中の『萌夏』も正月返上で社長の出張に付き合つているようだつた。彼女とその上司であるあの不真面目な社長との中はとても良いようで、同僚との会話も節々に中の良さがにじみ出てくる。普段仕事で忙殺されてしまつている僕には彼らが同じ会社の人間だということが信じられなかつた。

Honoka Kuwahara sent from Kyoto

Feb. 3. 20XX

今日も社長さんに付き添って出張です。京都なう♪。

もうすぐここに来て1年か、色々あったけど成長できた♪ 気がするかな
ぜんぶ金田社長のおかげだな~って最近思っています❤



Like Comment

Kaneda, Sato, Suzuki and 55 others

Kaneda

オレのほうこそ、いつも萌夏にお世話になってるからね、ありがとう。
そしてこれからもがんばって！

Like • Reply

Shimoda

感謝の気持ちを忘れないのは大切よね。特に萌夏は金田さんのお気に入り

完全に心酔してしまっていることが明らかに投稿達。それでも僕は信じられなかつた。と言うより信じたくなかつた。全てを忘れるために僕は明日からの業務スケジュールを復習し、より深く仕事に打ち込んでいつた。全ての不都合な真実を頭の奥深くから消し去るために。

そして六月。今日は僕達が婚約した日だった。それなのに、僕は上方から押し付けられた業務で押しつぶされそうになつて息も絶え絶えで残業していた。

僕がパソコンの前で集中しているとコトリと隣で音がした。振り向くと萌夏がそこにいた。正直夢ではないかと思った。ああ、やっぱり彼女も覚えていたんだつと安堵した。なんだか僕の知っている彼女と雰囲気が微妙に違う気がしたけど、あまりにも長い間ゆつくりと彼女のことを見る機会がなかつたので確信が持てなかつた。それにもしかしたら結婚一周年記念日だから気合を入れているのかもしけなかつたから。

僕は軽くお礼を言つて渡されたお茶を一口飲んで口を開く。

「ああ、萌夏：」

僕は彼女にかける言葉も忘れてしまつていた。

氣まずい沈黙。その沈黙がこの一年、彼女と結婚してからどれほど僕達が離れてしまつていたかを示してしまつてゐる気がした。

「今日も残業してゐるかなつて、お疲れ様」

そう言つてゆつくり萌夏が微笑んだ。ああ、僕の知つている彼女だ。
そう思つた瞬間視界ぐらりと揺れた。

第二話・九月 セクハラの季節 .. 金田視点

桑原萌夏は、はじめは嫌がっていた。だが、思つた通りチヨロかつたといえ巴チヨロかつた。面接でひと目見たときからこの生意気なオンナが望んでいるのは地位と尽くす相手だとわかつていた。

まず、最初にやつたことは桑原の旦那の業務を増やすことだつた。就職してすぐ結婚したと言うのは人事を通じて話がはいつていた。いくら職場で別姓を使つっていても社長のオレには筒抜けつてわけだ。適当にどうでもいい雑用を大量に萌夏の旦那に押し付ける。まあ、もともと残業をいとわない社畜タイプだし、便利なやつだつたから今回も文句も言わずに自分の時間をオレにくれたつてわけだ。

そして旦那が自分の時間をオレの会社に捧げている間にオレは萌夏に近づいた。面接でコイツが旦那に尽くしていてそのためにウチに就職したことまでわかつてるわけだからあとは旦那の昇進の話を出せば簡

単に動かせた。

はじめは社内の連絡係としてオレのところによく呼び出して、それから旦那の案件を影からサポートするための接待の『同伴』として指名した。旦那の業績評価を上げてやると言つて何度かパートナー・カンパニーへのミーティングに同行させてやつた。ウチの業界のそこそこ有名な取引先に引き合わせてやつて、うまい飯でも食わせてやればだんだん接待要因にされることにクレームを付けてくることもなくなつた。

そして接待の後は打ち合わせだと適当に理由をつけてプライベートミーティングをセッティングしてやつた。もちろん仕事の話もするぜ。でも、二人だけでねつとりあの巨乳を揉みながらだ。最初にやつたときは旦那が失敗した取引先へ謝罪に行つた後だけな。社長、自ら謝罪に行くって言つたら萌夏のやつ感動してたつけな。まあ、オレは口だけで謝罪するのとか別になんとも思つてないし、そのあとのプライベートミーティングで旦那のために謝罪させちまつた罪悪感と旦那の業績評価を傷つけたくない一心から抵抗もなくオレに胸を揉ましてくれたぜ。あ

あ、今からは想像もつかないいうぶな反応だつたぜ。

「社長、何をするんですか」

「何つて萌夏のプライベートミーティングだよ。ほら、そんなにカワイイからさオレももつと仲良くなりたくなつちまつたつてわけだ」

「やめてください！」

「もつと抵抗してもいいんだぜ。萌夏のそのブリップルあいた唇だつてかわいくてしかたないんだから」

そう言いながら壁際に押し付けて壁ドンの体勢で見つめてやる。もう密着して逃げ場がない状況で褒めまくつてやる。

「ほら、もつと怒つてもいいよ。怒った萌夏の顔もいかにもクールビューティでそそられるんだから」

「社長、これはセクハラですよ」

「だからどうするのさ。キミにこのケースでできることはないんだよ。警察に行つたらキミ達は夫婦でクビだからね。それにせつかくキミの旦那さんの損失を埋めるためにオレがわざわざ謝りに行つてあげたんだ

よ。妻としてどうすればいいかわかるよね」

そのあとはたっぷりあの豊満なデカ乳をたー。ふり褒めながらいじつてやつたぜ。乳首がコリコリになつて腰が揺れ始めるまでね。

「悪いようにはしないって。ちゃんと萌夏にもベネフィットは用意するし、すこしの間このめちゃくちやキューートなバストを触らせてくれればいいだけなんだから。こんなにカワイイの胸をもつてるのって萌夏だけだし。肌もすべすべですごいいい匂いがするぜ」

基本的に褒められて嫌な気分になるメスはない。堕ちるまではでまかせだろうがなんだろうが褒め続けるのがオレの流儀だ。褒め殺しつてやつかな。つけど、注意しなきやいけないのは褒めるのは絶対に体と能力だけにすることつてことだ。個性とかキャラクターとか、そういう面倒くさくてオレに刃向かう部分は絶対に褒めちゃいけない。

「今日の取引先に萌夏が出てくれた提案だけどさ、あれめちゃくちやタイミング良かつたよ。キミはほんつとビジネスのタレントがあると思うんだよね」

「ああっ、何を急に」

「急にってこれはミーティングなんだから今日のレビューするのは当たり前っしょ。あつ、乳首立つてきたねブラの上からでもわかるぜ」

エロいことをしながら仕事の話を振つてやる。これを繰り返すことでだんだん仕事とプライベートの区別が曖昧になつていくし、そしたら生活の中で比重の大きい業務の方に全部が引きずられてくのも論理的帰結つてやつた。まあ、この時点では性的なことを仕事の一部にはしないつつう常識があつたわけだけどね。

それ以降も接待の度にプライベートミーティングをセッティングしてその度に適当なプレゼントや簡単に成功できる案件何かを餌に黙らせてやつたつてわけだ。もちろんミーティングだからちゃーんとオレの交渉テクも手取り足取り指導してやるわけだが。

たとえば、もうほとんど抵抗しなくなつた△回目ぐらいだつたかな。

「山田物産の社長だけさあ、もつと強気に言つてもいいんじやね」

「そつ、それは…どういうことですかあ…ああっん！」
「あそこはパートナーが業績悪化してつからなつけ込みやすいわけ
よ。

ホラ、もつとケツつき出せ」

すっかり言いなりになつちまつてよ。尻を突き出してくるもんだから、
オレとしてもチンコこすりつけるしかないじやん。あいつもオレのデカ
チンコ、ケツで感じながらまんざらじやないみたいだつたしな。

「ほらつ、オレが萌夏を責めるぐらいガンガン足元見てつけ込んでい
つちまつていいってことだよ。ほら、お前の足元見てみろよ。ラブジユ
ース垂れてるぜ」

「ああんつ、そんなあ。それは社長が指を入れてくるから」

「おいおい、この前言つたろ。オレのことはプライベートミーティン
グでは『金田さん』だろ。ほらつ言うまでウリウリしちゃうぜえ」

そう言つてクリトリスに軽く爪を立ててやる。こここのところの『プラ
イベートミーティング』ですっかり萌夏の弱点はわかつちまつたからな。

「ああんっ！」

社長室に萌夏の声が響く。オレはかなり前かがみになつている萌夏の手を取つて、オレの股間に誘導してやる。

「ほら、責める練習だ、トライアルだぜ。どれくらいきつく締め上げればいいか教えてやつから、オレのペニスを責めてみろよ」

一瞬、萌夏が困つたように止まる。もちろんオレはそこで考えさせる余裕なんか与えてやらない。このタイミングでブラウスの中に腕を突つ込んでブラ越しに乳首をグリグリといじつてやる。

「ああんっ、ダメです！」

そう言うが快感の反応として彼女の手がオレのモノをズボンの上から握る。

「ホラ、もつと強く。我が社の利益のためだぜ。プロフィットを出せ！」

耳元でささやきながら右手で乳首を左手でグシュグシュに濡れたマンコを愛撫してやる。まつ、これでやつても出てくるのはプロフィットつてかザーメンなんだがな。

「いやですううんん！金田さんつ…つはあつ！」

そう言いながらも彼女の白い指先は徐々に強くオレのチンポを服の上から弄り軽く勃起したその部分を掴んでさわさわとなでてくる。彼女の指の強さに比例させてオレの愛撫を強くしてやる。口では嫌がりながらも既に萌夏の体はオレの愛撫を求めている。無意識的に揺れている腰、オレに抱かれすい体勢を取ってしまっている胸。体の方はもうオレに愛撫されることに慣れて、更に貪欲に快感を求めてしまっているのが明らかだ。

オレはその時点での一度萌夏の胸から手を離し、自らの勃起したチンコを露出する。オレの手に導かれるままに萌夏の術すべての手がそれを握る。

「ほら、旦那にやるみたいにシコシコしてみろよ」

そう言いながら再び乳首を責める。今度はブラの上からじゃなくてブラの中に手を突っ込んで乳首を思いつきりつまんでやる。

「あああん、あのにはそんなのしたことお…んつ、ないです！」

おいおい、旦那のは握ったことないのかよ。こういうアホなピュアガール大すぎだぜ、オレ好みにいくらでも変えられつからな。

「つじやあ、会社のことを思ってくれよ。オマエが握つてるのは次の契約だぜ。ホラ強く握つて話すなよ。少しでも強く握つてたくさん金を吐き出させるん」

「あああん！ そんなの、わけがあつ…わからないです…んん！」

オレの手のひらで悶ながら、萌夏がそういう言う。だが、そう言いながら彼女の指はガツチリ旦那のものではないチンコを握つてゆっくりと上下にしごいていた。

「ほらつ、もつと強くていいぜ。カウパー液が出てきたらソレがエビデンスだ。もつともつと攻めてやれ。お前の覚悟を見せてみろよ」

ニチャニチャと徐々に彼女の指がオレの先走り汁で汚れ粘ついた音を立て始める。

「ホラツうまいぜ。これはビジネス。そうだろ、もつとうまくディールできるようにオレのペニスを握つて離すな」

「はあっ、これがあビジネスう。ディール…」

トロンとしながら彼女が言う。だが、もう彼女の指は迷いなくオレのものをしごき立てていた。旦那のものも手コキしたことがないと言つていたのにビジネスと言つてやればこのとおりだ。マジ新入社員ちよろいわ。

そう思いながら彼女と密着し抱きしめてお互いの性感帯を刺激し合う。

「そうだ、うまいぞ、萌夏。ディールの才能があるぞ。もつと頑張れ」「はあつん…あああん、ディールのお…才能がある…はあん」

まつ実際はディールってかただの手コキだけどな。萌夏の耳元で彼女の自尊心を刺激しながらその秘所に指を入れてクチヨクチヨカキ混ぜる。

「おお、取引成立だあ…んんああ」

「はあああああんんつ、わ、私もですう！金田さん」

彼女の手首に向かってビュルビュルビュルつとオレのザーメンをか

ける。同時に彼女自身も絶頂し、オレの手に向かってピュツピュツと潮を吹く。

そのまま抱き合いながらお互いの息を整える。

「よかつたぞ、萌夏。これで契約も取れる。間違いない。記念撮影しようか。萌夏がオレとデイールの特訓したエビデンスにね」

そういうつて彼女のザーメンに濡れた左手をラブジユースで濡れたオレの左手で取り上げて指を絡めて、自撮りする。カシヤリとスマホが音を立てて彼女が旦那ともしたことがなかつたプレイの様子を切り取る。

その後、オレはエルメスのハンカチで彼女の手についたザーメンを丁寧に拭つてやつて、それからオレのチンポを磨いてチンカスまみれにする。ドロドロになつラグジュアリー ブランドのハンカチにシャネルの香水をふりかけて匂いだけごまかして萌夏に押し付ける。

「じやあ、次の取引は萌夏中心でやるからヨロシクね」

もちろん、その取引のときも後ろから相手先に手を回して成功したよう見せかけてやつた。何も知らない萌夏は無邪気に喜んでオレのチン

コをまたシコシコしてくれたってわけだ。

第三話 ..十一月 調教の季節（1） ..金田視点

他には相手先のおっさんの目が完全に萌夏の胸をロックオンしてたこともあつたつけな。まつ、あのデカ乳だ。しゃーない。つで、オレはプライベートミーティングで教えてやつたわけよ。

「今日のハゲオヤジ、ずっとお前の胸を見てたな。どうだつた」
もちろん胸をわつしやわつしや思うがままに揉みながらな。

「正直、気持ち悪かつたです：あはつんん！」

「こんな敏感なのにな。次会うときはジャケットは無しで黒のブラを透けさせろ。そしたら話が入りやすいからな」

「んん：そんな。いやですうつん！」

「お前女だろ。使える武器は使えよ、オラ社長命令だ」

「ああんん！そ、そんなあ」

この時にはもうオレに抵抗する気はなくなつてたっぽくて素直に言うことを聞いてくれて契約が取れてみんなハッピーダッタわけだ。それ以降、オレがセクシーなの着て来いつつたらちやーんとエロエロなのを着てくるようになつたぜ。多分、旦那の前でもしたことないようなやつ。まつ、本人が気がついてないのは萌夏もオレの『使える武器』、便利な道具の一つでしかないってことだつたわけだけどな。

そんな感じに『新人教育』しながら社長室秘書にしてやたつてわけだ。もう、会社にいる時間の半分は以上はオレと同じ部屋だ。残業で帰れない旦那と一緒にいる時間はせいぜい4~5時間つてとこだが、秘書の萌夏がオレの部屋にいる時間は「~」時間。その上ランチやディナーにも連れて行つてやつてる。

ちなみにここまでダシにされてる旦那だが、業績評価を上げてやるわけがない。あげるふりをして見せて、こんなに上げてやつてもダメダメ

なお前の旦那マジ無能って優しく萌夏に囁いてやる。はじめはいちいち反論してたけど、最近は何も言わなくなつた。旦那がダメなエビデンスが多すぎて反論できなくなつちまつたかな。まあ、そのエビデンスは全部旦那の実際の能力とは全然関係ないんだけどおバカな萌夏が気がつくはずはない。

そこでもつともつとオレに対するインセンティブを上げてやる。仕事用として萌夏に林檎のデザインで有名なおしゃれなコンピューターを買ってやつて業界の人間とつながるための SNS の使い方を教えてやる。SNS のフォロワーがどんどん増えてオレへの高感度が目に見えて上がっていく。まつ、そのフォロワーの大半はオレが後ろで手を回して金で買ったアカウントなんだけどな。

次は萌夏の意識改革だ。社是の通りイノベーションを萌夏に起こして、オレの好みに書き換えるつてわけだ。はじめはとある有名な業界人の有料勉強会に行かせるところから始める。そして社長秘書として簡単なスマートプロジェクトに出向させて、適当に活躍させる。そしてそれを褒

めまくつて給料も上げてやる。

外から見ればイケイケのOLってわけだし、本人的にも全部うまくいっていて自信が出てくるってわけだ。まー、全部オレがお膳立てしてんだから当然なわけだが。そしてそのあたりで少しトラブルを用意してやる。めちゃくちや落ち込む系のやつ。当然、外からのイメージを守りたい萌夏は外部の人間に相談できない、しかも旦那は相変わらず忙しくて話す時間もない。まつ、この時点でもすでに旦那の能力には見切りをつけてたかもしれないけどな。つーわけで萌夏が頼れるのは毎日社長室で顔を合わせる超有能なオレだけってわけだ。

落ち込んでる萌夏を気晴らしに高級ホテルに誘つたらホイホイついてきちまつて笑えたぜ。フレンチを食いながらロジカルなソリューションを提示してやつたら、まるで天のお告げでも聞くみたいに真剣な顔してメモとつてんの。

もちろんその後はホテルでしつぽり熱い一晩を過ごしたってわけだ。旦那のことなんて全く頭になかったと思うぜ。浮気させちまつたお詫び

につつてダイヤのネットレスをやつたら一瞬『浮気』って言葉に納得
いってなかつたし。

「え、ああ。そうですね。浮気しちゃつたんだ、私」

つてまるでそこで初めて浮気したことを自覚したみたいなことを言う
もんだからオレは笑いをこらえながら言つてやつたんだ。

「萌夏の辛い時に横にいられるのがオレでよかつた。萌夏のモチベーシ
ョンをあげられるんだつたら何だつてするのがプレジデントとしての
オレの勤めだから」

そしたら、萌夏のやつマジマジとオレのことを見てそのままキスして
きやがつた。浮気だつてわかつた上でだぜ。

それ以降萌夏の化粧に入り始めたから、あとは簡単だつたぜ。
ちよつとオレ好みの服をプレゼントしたら喜んで着るようになつた。はじ
めはブランド物のバッグからスーツ、そして下着まで。下着。プレゼン
トしたら、意味はもう分かるじやん。でも全然拒否らねーの。

その頃にはどんなにセクハラしても嫌がらなくなつて、むしろとろん

とした目でオレのことを見てくるし、会社の接待に行つた日はホテルに二人で止まるのが普通になつちまつたぜ。

笑えるのは旦那が自分がサビ残で家に帰れてないから萌夏も同じだと思つて疑いもしなかつたことだ。スーツが代わつて、オレのプレゼントしたアクセをつけてんのにな。まつ、平の社員じや社長秘書サマと会うこともそんないから当然か。オレも確信が持てるまでは二人をセパレートしておきたかったしね。

「金田さん、今日もこの後ミーティングいいですか？」

「そう萌夏の方から聞いてくる。

「ああ、いいぜ。どこでやる？」

「ふふ、どこでもいいです。金田さんのコンサルテーションを受けるなら」

「じゃあ、今日は早く上がつてオレのうちに来るかい」

「ええ、よろしいのですか？」

「優秀な社員と個人的に付き合うのはプレジデントとして当然だよ」

そうケツをもみながら言つてやる。普通の状況ならまずセクハラ案件だが、萌夏はその段階までは既に教育済みだ。

「ではお言葉に甘えさせていただきます！ああん！」

そう言つてしまだれかかつてくる。オレはそんな萌夏のケツを支えながら駐車場のベンツに向かう。外車に載つたことがないという萌夏を連れて一通りドライブに連れてつてやる。そして夕食を作つてくれとオレの好物の『お願い』してやる。まつ、今後オレの身の回りの世話をすることになるんだから早めにしつけとかなきやね。旦那の色はさつさと脱色して萌夏をオレの色に染め直してやらないと。

他の秘書がおいていつたエプロンを使わせる。萌夏の雰囲気とは真逆のフェミニンなやつだ。そんなものがどうしてあるのか彼女は訝しんでいたが、社長命令で普通にスーツの上から来て調理していた。そしていま、夜景の見えるオレのタワーマンションの最上階のリビングで食べながら彼女の愚痴を聞いてやる。大抵は取引先への不満だ。

「本当にあそこの社長って横柄で傲慢で最低ですよね。まず、一緒に

やろうっていうパートナーマインドが全然感じられませんし。あそこ以外に選択肢がないから仕方なくつきやつてあげてるだけなのに…」

オレの意見を代弁してくれる萌夏に満足感を覚える。うんうんと適当に相槌を打ちながら彼女の背後から服のボタンを外していく。抵抗する気配は当然ない。彼女の黒いオープンブラがあらわになる。オンナとしての肉感を武器にするよう指導して以来、彼女は自分で海外の高級セクシーランジェリーを買うようになった。黒いオープンブラの先端から飛び出た乳首が既に彼女が興奮していることを示している。そして下着姿になつた萌夏に命令する。

「今日はまず口でやつてくれないかな。指導されるものとして準備するのには当然の礼儀だと思うんだけど」

「もちろんです。では金田さん今日のレクチャーの準備を私のお口でなさつてください」

下着姿の萌夏が丁寧に着衣のオレのズボンのチャックを下ろし、その白い指で丁寧にオレのものを出す。

「右手で調整しながら左手で金玉をマッサージしな。ペロペロは丁寧に上方から愛情を込めてな」

チュチュっとオレの指導に従つて萌夏の舌が恐る恐る亀頭に乗つかる。

「ほら、キスをする容量で吸うんだ。オレからビジネスの知識をいっぱい吸收したいんだろ。どれくらい吸いたいのか見せてみろよ」

チュウウウウツツと強く吸われる。そのまま

尿道に萌夏の舌が差し込まれオレの小便で汚れた穴をメロペロする。いい傾向だ。入社したての頃は愚か、ほんのひと月前でもここまではしなかつただろう。どんどん彼女の中でオレの存在が大きくなっている証だ。そのまま彼女の中でおれの存在が彼女自身より大きくなるまでちゃんと教育してやらなきやな。

そう考えながら、萌夏の頭を撫でる。

「黒髪も陰気だし、もうすこし明るために髪染めたらどうだ。接待にも花になるとと思うんだけどね」

「ふあ、しょ、しょれは…」

オレのチンポから口を話さずに口ごもる萌夏。あーあ、これはいけない。まったく許せない。ぐいっと頭を掴んでチンポから離す。

「萌夏、オレはな、お願ひしているわけじやないんだよ。前にいったろ、社長の言葉はなんだつけ?」

オレを見上げる萌夏の表情が悲しげに変わる。自分のミスがわかつたんだろう。すでに彼女は引くにはあまりにも色々なものをオレに与えすぎた。すでに旦那と同じ程度にはオレのことと思つてしまつていて。そんな相手から直接拒絶の言葉を聞きたくはないのだ。

「社長のお言葉はすべて命令です。プレジデントのオーダーはカスター・マーやメンバーや私自身よりも優先：されます」

最後少し口ごもったな、コイツ。もっと責めるか

「じやあ、論理的に染めない理由を説明してみてよ。少し髪を染めるくらいのことで会社の利益が上がるんならむしろ自分から染めますって提案するぐらいがクリエイティブな社員の行動だと思うんだけどな、オ

レは」

実際問題こんな気持の問題で会社がどうのこうの話ではない。だが萌夏はもうそんなふうに考えられないだろう。なぜならすっかり彼女のプライベートも内面も会社に依存してしまっているから。オレが依存するようにさせてきたからだ。休日まで含めて会社の業務をさせて、喜びも悲しみも会社と一体化させる。オレの好みの衣類や種類のフォーマットを強制し、それを彼女自身の好みとすり替えさせる。オレがこう感じろといったことは彼女の感情にならなくてはいけないんだ。

「すみません。そうですよね。社員として社長の指示に違うのは当然のことなのに、私ったらなんで嫌だと思つたんでしょうか」

「そうそう、あとでちやんと萌夏に似合う染料を選んでやつからな。あと、きちんと染められたら新しい髪の色に似合う髪留めを銀座のジュエリーショップに選びに行こうか」

「金田さん、ありがとうございます！」

すぐに萌夏がいつもの表情に戻る。自分の意志が捻じ曲げられたことな

どなかつたように。

「萌夏、これだけは覚えとけよ。オレに対してできないというのは基本的にすべて言い訳なんだ。まず、拒否する前にやってみろ。やりもする前から否定するな。ポジティブマインドだ。今までだつてオレの言うことは全部正しかつたら、ほらわかつたら、続くだ」

こくんと笑顔で頷いて萌夏が再びオレのチンポにキスをする。

第四話・十二月 調教の季節（二）・金田視点

チユチユ・ちゅふつ・べろべろと水音がする。萌夏が一生懸命オレのチンポに舌を這わせて奉仕しているのだ。旦那は時間的にまだサビ残をしている頃だろう。妻が社長の自宅でフェラをしているとも知らずに。「じやあ、まずさつき行つたことの実習だ。これから、萌夏がどれだけの会社のために、オレのために耐えられるか試すからな。これをクリアできるタフな社員はあんまりいないが、オレは萌夏だつたらできる思つてる」

「ハイ！ありがとうございます。頑張ります！」

何をするかも聞かずに萌夏がそういう。こういうのがオレの理想のメス社員だ。オレはそのまま萌夏の頭をつかむと一思いにオレのチンポをその口に突っ込んだ。喉奥にゴリゴリとオレのチンポを押し込んでグリグリと萌夏の喉が反射的に痙攣して拒否しようとして。ピク。ピクと亀頭

の先を刺激する感触を楽しむ。

そこらの風俗嬢だってこんなに無理やりやれば嫌がつて拒否しようとするもんだろう。だが萌夏は懸命にオレのデカイものを受け入れ続けようとする。健気にもなんとか耐えようと涙とよだれで整っていた化粧をグチャグチャにしながらも一生懸命オレのことを受け入れようとする。

そんな顔を見たらますますオレが高ぶつてもつと使いたくなると思いませずに。オレはそんな健気にすべてを捧げてくれる女子社員への教育に満足しながらガンガンつと遠慮なく突き上げていく。もうオレにこいつは十分依存しちまっている遠慮は必要ない。会社の備品と同じ消耗品だ。

そのまま喉奥にゴリゴリオレの排泄器官を押し付けてビュルビュルつと射精する。もちろんオレのザーメンを吐き出したりしないように頭を押し付けながらだ。そして数秒に渡る射精の後にやつと離してやる。

「んぐほおつん、ごつほごつほんああ…あ、ありがとう…んぐつ…

ございます」

こんなに乱暴にしても丁寧に礼を言うことを欠かせない。ビジネスマナーはちゃんと知んなきやね。

「おい、化粧が乱れてるぞ。直してこい。あと、この下着をやるからこれに着替えてこい」

そう言つて派手なレザーボンテージをわたす。

「はい、ご指摘ありがとうございます。金田さん。金田コー。ボレーシヨンの社長秘書に恥じないようにお色直しさせていただきます」

そういうて萌夏は着替えてきた。性を否応なく意識させるボンテージ。ベッドの上でオレが肩を抱きながらやさしく語りかけてやる。厳しい指導の後にはちゃんとアメをやらないとな。まあ、そのアメも毒入りなんだが。

「どうだ、オレの会社で働いて半年以上が経つたわけだけど?」

「はい、なんだか生まれ変わった気がします。今まで自分がどんなに甘い世界で行きてきたのか自覚させられちゃいました。金田さんのご指

導がなかつたらとっくに私はこのシアビアなビジネスフィールドからドロップアウトしてしまつていたと思います」

ジーとボンテージの股間の部分のジッパーを開ける。オレの指導によつて剃毛されたみずみずしい肉の割れ目がすでに渴望のラブジュースを垂らしている。順調にマゾ化していっているようだ。

「そうだろ。オレは社員思いだからな」

そう言いながらそのマン肉に指を食い込ませる今すぐにでもぶち込めそうな穴だつた。

「はい。本当に金田さんには感謝しています」

そういうつてしまだれかかつてくる萌夏。入社したときからどれくらい変わつてしまつたか本人すら理解していなさそうだ。まつ、理解したところでいまの萌夏なら過去の自分を否定してオレに媚びて会社の備品になることを正当化するんだろうがな。

「じやあ、今日は萌夏の顔を見ながらレクチャーしてあげようか。ほら、そこでこれから教育される場所を見せてご挨拶しようか」

そう言つてオレのベッドを指差す。海外から直輸入した洒落たデザインのキングサイズベッドだ。うちの会社のカワイイどころはだいたいこのベッドで体液を撒き散らしてきた。

そのベッドの上で、萌夏が三字開脚する。まだ大学を津業して1年経っていないみずみずしい場所がボンテージのセクシーなデザインに彩られて卑猥にとろとろ泣いていている。そして彼女はその場でその部分をオレにハメられるためにくぱあつと指で開いてみせる。

「金田コーポレーション社長秘書の桑原萌夏の社長専用オマンコはもう準備完了です、金田社長さん♡。我が社のモットーは『イノベーティブなソリューションでビジネスに種をまく』ですよね。ラブジュースがところところうつてなつちやつてるオマンコはあ、早く金田さんのホットなソリューションをぶち込んでほしくてえ我慢できないんですう♡」

エッチの前に折れの会社のモットーを思い出させるのは基本だ。セックスがカップルの営みではなくて会社の業務の一環だと自覚させるために。そして萌夏の場合もうひと工夫。

「おいおい、いいのか？お前には旦那がいるんだろ？」

「はあんつ、そんなことは言わないでください。これはあ、お仕事なんですから。金田コーポレーションの実績が増えればあの人も喜ぶしい、そのためには、私が社長のレクチャーを受けるのは仕方がないことなの♥」

とても仕方がないと思つてゐるようには見えない積極的な口調で、そ
うせつなそうに言う。まだ、旦那に未練があるようだ。あと少しなのだ
が、なかなか萌夏は抵抗してくる。まつ、そんなメスを征服するのが樂
しいんだがね。オレはそのままゴムを付けて萌夏に襲いかかる。

「ああん、社長さん」

形式だけ抵抗して押し倒される萌夏。

「そうだ、仕方がないんだ。これはヴァイタルな案件だからな」

そう言つて口づけする。すぐに媚びるように萌夏の舌が絡みついてく
る。

「んちゅつぶちゅう…ちゅぱつ…そうなんですう…仕方ないのお…じ

ゆるるるるるるる

仕方がないと言いながらオレの唾液を積極的に吸い上げる萌夏。知識やテクニックを吸いとりたい『姿勢』を見せるためには積極的にどんなものであろうとオレの体液は吸い上げるように『指導』しているからそれも当然だ。

そうして抱き合いながら腰を下ろしていく。さり気なく萌夏の手がオレのチンポに添えられ入れやすいように誘導する。ちゃんと気遣いのできるオンナになってきたつてわけだ。流石、オレの教育メソッド。

すっかりトロトロに出来上がったマンコにズブズブっとオレのデカチンポがまるで吸い込まれるように落ちていく。

「んんんっはああんん…入ってきますうう…んんっあああんん」
ちよつと前と比べればだいぶ広がったものの、まだ狭くてきつい萌夏のマンコ。オレは潤んだ瞳で見上げる萌夏の目を冷たく見下ろしてやる。彼女の瞳にあるのは依存で、つまりオレの思うとおりになるってことだ。愛情なんて必要ない。オレの会社の社員らしくモノになり下がったオン

ナの瞳だ。

「かんじるだろ？お前のマンコのキヤパシティが広がってるのが。この意味、わかるだろ」

「ふああんん：ハイ！わ、私のパーソナルキヤパシティがあ…あああんん：金田さんによつてええ広げられてますう…ちゅうつチユープ…ちゅるるるる」

そう言つて愛しげに吸い付いてオレの唾液を舌で吸い取つて飲み込む萌夏。

まつ、広がつてんのはお前のマンコだけなんだけどな。オレは心のなかでせせら笑いながら、腰を振りたくる。せまく吸い付いてくる萌夏の体が全身で少しでもオレを気持ちよくしようと媚びてくる。

「ああんんつあんあんあんあんつつか、金田さんのおつ、ぶつといおちんちんがああつ…ヒヤあああんんんつ、私のおおお奥の奥まで責めてるのお」

「おいおい、攻められるだけかよ？そんなんでうちの会社の社員やつ

てけると思つてゐるわけ？」

腰を振りながらそう問いただす。萌夏が蕩けきつた顔でクビをいやいやしながら潤んだ瞳でオレの言葉を噛みしめるように答える。喋ろうとするオンナをよがらせて喋らせないのはまじ楽しい。

「あああ、ご、ひやあんん、ご、ふああああんん、ごめんなさあいいい…あああんん。せ、いやあんん、攻められたらああ…あんあんあんあんつあ…攻め返すのがああ…びつひやああん、ビジネスですうう」

そう言うとより深くくわえ込もうと萌夏の足がオレの腰にまわされ全身で抱きついてくる。まるで彼女の体と一緒に魂まで預けるように。

「ああ、そうだ。いいぞ。お前はできる社員だ」

ちなみに今まで萌夏にしろ他の秘書たちにしろ『彼女』や『妻』などと読んだことは一度もない。『社員』『オンナ』『備品』などがこいつらにとつて正しい呼び方だからだ。

「ああんんん、うれしいですう

再びキスの嵐だ。

オレはそのままキスをしつつ腰を振りたくる。ガンガンっと激しく彼女が旦那から与えられた僅かな快楽の欠片まで残さないように、全てオレのチンポで塗り替える。

「あっあっあんあんあんあん…ふあああんん…ひやああんんん」
絡みつくマン肉、媚びる萌夏。オレはその唇を吸い、子宮口を押し上げ、萌夏のさしだしてくる快楽の全てを根こそぎに奪い、更にそれ以上をくれてやる。

「あああんん、あんあんあん。イッちゃうイッちゃうううう、イッちゃつてますううううう」

オレの下で叫ぶ萌夏。始めの頃は声を必死で我慢して絶頂も隠していたような萌夏だったが、おれの『指導』のお陰で今ではそこらのAV以上にいい声でなくメスに成り下がった。

「オレはまだイッてないんだぜ。おい！」

「あああんん、ごめんなさいいい。ひやああんん、しょ、しょんなに深く突かれたらああああああんん！ダメですう、ダメダメダメえええ」

「何がダメなんだ？勝手にイッて弱みを見せたオマエが悪いんだろ。自己責任だろ。おい、もつともつとイキやがれ」

絶頂して感度が上がった膣穴を更にガンガン責め立てる。収縮する萌夏の肉袋が必死でオレのチンポを受け止めようとする。

「ひやああいいい、しょ、しようでしゅけどおおおつお。あんあんあんんつつあまたイツちやううううう！ダメダメダメなのにいい！」

「イキすぎてバカになつてんじやねえよ」

そういうながらオレもラストスパートを掛ける。

「ひやんひやんひやんひやああああん、いきしゅぎてええとみやらにやいのおおおおお！」

そう、旦那のものではないチンポにより狂わされてアホ面を晒している萌夏。普段の澄ました顔を知ってるからこのイキ狂った間抜け面が何十倍も滑稽だ。

「おお、オレもイクぞおおおお」

そう宣言してより深く突っ込む。

「あああああああああああああんんんんんん、ふきやいいでしゅううううううううう。壊されてるのおオオオオ」

長い絶叫、全身全霊でオレの胸に抱きついてくる萌夏。そして絶頂し、繫がつたまま脱力する。どくどく吐き出されたオレのザーメンの感覚。ほどよい倦怠感。オレの下敷きになつてふかふかのキングサイズベッドに埋まっている萌夏。彼女の足は未だにせつなそうにオレの腰にまわされている。

「はあはあはあ：感じたよ、萌夏」

「はあはあはあ：私もです」

そう上がつた息を整えながら笑い合う。

「髪、染めてくれるよな」

ためらうことなく回答が返つてくる。

「はい、染めさせていただきます」

そのうちタトゥーも入れさせるかな。

第五話・三月 教育の季節（1）金田視点

クリスマスはもちろん萌夏にサンタコスをさせて接待させて、その後オレのマンションに連れ込んだ。最近では週のうち1～2晩はオレの部屋で泊まつていつていてる。そして年末年始はもちろん旦那と引き剥がし、オレの出張に付き合わせる。秘書課の女子社員四人を全員連れての海外出張だ。他の秘書課の女子と姫始めの乱交をさせたときはさすがの萌夏も引いたようだったがきちんと教育された先輩に『指導』されてすぐに馴染んでしまった。

ほかにおもしろかったのは萌夏がどこまでいけるのか試したときだ。とある重要な取引先の社長とのミーティングで、ちょっと小芝居をうたせてやつた。相手は超大手企業のエロオヤジ、萌夏にはミーティングの前にこの取引の重要性をふか〜くいい含めてやつて、それからギラギラのキヤバ嬢のドレスを渡してやつた。さらに、太ももにこつちの契約条

件をマジックで書かせて取引相手の隣に座らせてやった。

ここまでやらせても、もう全然拒否らねーの。もう完全にオレのものになつたつて確信したね。会社のためにセクハラに耐える強い女子社員が増えてオレは嬉しいぜ。あ、もちろんエロオヤジに許してやつたのはパイモミまでよ。まだ萌夏は堪能しつくしてないからね。会社のために体を売るのはもうちよい後、オレが飽きてからだしね。

萌夏はもう全然抵抗しなくなり秘書課の女子たちとの付き合いを通じてさらにオレに心酔しているようだつた。新年の旅行以来週末は秘書課の女子たちで女子会をしているらしい。オレの書いた自己啓発本をみんなで読みながらお茶をしていると嬉しそうにSNSに書いていた。この前ついに、会社のロゴのタトゥーを入れさせて『ください』と頼んできた。

そんな感じで会社の業績と一緒に、萌夏の精神改造も順調なわけだ。そして今日も大きな取引に付き添わせてやつた。オレの横で飾りとして座つているだけなのに一丁前に緊張しやがつて。

「どうだつた億単位の取引は。ゾクゾクするだろ?」

「緊張してしまつて、クールダウンするのが大変でした:」

「はは、それをエンジョイできるようになれたら一人前だぜ、萌夏」

「頑張ります!」

そう言ひながら彼女はオレの方にお尻を向けて短めのスーツのスカートをめくつて下着を見せる。オレに出会わなければ絶対履くことなんかつたどぎつい金色のテカテカの下着だ。今日の取引のために勝負下着を『自分』で買ってこいと言つたからこれは萌夏が選んだものだろう。全体的に服の好みも清楚なものからエロいものに変わってきてオレの影響が傍目から見てもわかるようになつてきてる。

「金田コーポレーション社長秘書桑原萌夏のオマンコで重要取引で滾つた社長の熱い肉簿をクールダウンさせてください」

社長のデスクに向かつてケツを突き出し、悩ましげに誘惑する。隣で座つている萌夏のメインの仕事はむしろ取引後のオレのストレス解消だ。柔らかいマン肉を取引のあいだじゅう弱いローターで刺激しておい

て、取引後にすぐにでも『使える』ようにしている。

オレは突き出されたケツを今日のムカつく取引先への憎しみを込めてバチーンとひっぱたく。

「ひやああんん！ありがとうございます！」

そう叫ぶ萌夏。こうするためにはこの部屋は防音室なのだ。薄暗い社長室のデスクライトだけつけて、ムードを作る。窓の外には有象無象の町並み。

おれはテカテカの派手な下着をなでながら聞く。

「旦那はサビ残してんのに、萌夏はオレと浮気セックスかよ」

「ああん、金田さんの意地悪。これはコンフイデンシャルな社長のインストラクションなんです。私のマインドを変えてできる社員に変えてくれる重要なミーティングだから仕方がないんですう」

そう媚びた口調でいう萌夏。入社したときはハキハキとしていたあの表情も今ではすっかりオレに媚びるメスの表情に変わってしまった。

「まつ浮気セックスするのも仕方ない：か。萌夏の旦那はサビ残しない

と業務が終わらない無能だからな」

すっかりオレが何を言つても否定しなくなつた萌夏にオレはさらにその先を要求する。

「ほら、萌夏。お前も言つてやれ、お前の旦那は無能だつて」

ケツをもみ、胸をはだけさせ、これから始まることを強調させながらそう囁く。

「えつ…」

そう衝撃を受けたように言う萌夏。

「おいおい、いつつもオレがお前の旦那の真実を教えてやつてるってのに、お前はそこから距離を取つて信じないでいたろ。そういう主観的なビヘイビアつてよくないと思うんだよな。萌夏の旦那なんだから、ちゃんと身内のこととは客観的に評価しないとね」

こわばつた表情の萌夏にそういう。くちゅりと濡れそぼつた割れ目に指を這わせる。

「そ、それは…」

更に口ごもる萌夏。

「へー、萌夏は会社より旦那のほうが大事なんだ。せつかくオレがこんなに目をかけてやつたのにな」

そう冷たく言い放つて距離を取ろうとする。実際にかけたのは目ではなくてザーメンなんだが、萌夏がすがりついてくる。

「か、金田さん。ごめんなさい。私が間違つてました。だから…」

「いや、いいし。結局キミも『できない側』の人間なんだつてわかつたし。もう帰つていいよ。無駄な感情に縛られて客観的な評価ができない、キミもキミの旦那と同じ人間つてことだろ」

さらにそう言つて追い詰めてやる。

「違います！」

そう嘆くように萌夏が言つた。

「何が？」

おれは突き放していた手をおろして聞く。

「私は…あの人とは違います」

「言葉はきちんというんだ。何が違うんだ？」

そういうつて急かしてやる。思考が俺オレに依存し、会社のためにすべてを捧げてきた彼女にとつてもう拒絶はできない。

「あの人は仕事ができないですが、私はできます」

萌夏は震えている。そして萌夏が震えているのは旦那を裏切ったことに対する罪悪感などではなく、オレに見捨てられることに対する恐怖からだ。

「じゃあ、最後のチャンスをあげよう。キミの客観的な旦那に対する評価をここできかせてくれ」

そういうつてもう一度萌夏の体を抱きしめてやる。オレの腕の中で健気にも震えている白い肌。

「ありがとうございます！」

「あの人は無能です。サビ残ばつかりで旦那としても不能です。私のスキルをアップさせてくれないどころかそこそこのレベルで満足することを強要する最低の負け犬です」

「そう萌夏が初めて自分の言葉で旦那を罵った。

「合格だ、萌夏。この部屋に残つてオレとのシーケレットミーティングを続けていいよ」

「ありがとうございます。

もう、私、迷いませんから。たっぷり『ご指導』お願ひします」
ちゅつと媚びるように口づけてくる。

「ほら、オマエが口をつけるのはそっちじゃないだろ」

「はい、こっちですよね」

媚びた声で萌夏がそう言つてオレの股間を服の上から扱き上げる。か
ちやかちやとベルトを外し、完全に慣れた手つきでズボンを下ろす。と
ろんと蕩けた目つきで膨らんだボクサー・パンツを見つめると先端にで
きたシミにチュウッとキスをしてそのまままるでパンツ越しに先走り
を吸い上げるように吸い付く。これもオレが指導したマナーだ。そして
思う存分布越しの男の存在を堪能したあとで萌夏がパンツを下ろす。
「ああん、あの人より大きいおチンポが出てきましたあ」

嬉しそうな黄色い声。さつきまでだいぶ脅したから当然か。そこでオレは萌夏の茶色く染められた髪をなでて言う。

「おいおい、『あの人』じゃないだろ。使えない社員を呼ぶときは、『自己満足野郎』だ」

まだ抵抗があるのか一瞬迷う萌夏。おれはプレッシャーをかけるようになでていた手を止めた。すぐにその意味を察した萌夏が懇願するように言う。

「あの最低の自己満足野郎よりも大きいおチンポですう」

「ではゴムを付けさせていただきますね」

そういうつて萌夏が下品なショーツの中からゴムを取り出す。愛液に湿った袋を破いて口にくわえるとそれを口でオレのチンポに嬉々として装着させる。ちなみに下着と同じくゴムも自費で買わせている。

「よしよし、じゃあケツをこっちに向ける。ご挨拶は今までの指導を意識してな」

そう頭をなでていってやる。萌夏はすぐに後ろを向きに、再び下着が

見えるようにスカートを捲り上げて悩ましげに腰をくねらせる。

「はやく、金田コー。ボレー。ション社長秘書の自己満足チンポじや満足できない淫乱肉袋に金田さんの浮気おチンポを突っ込んで思う存分使い倒してください！我が社のモットーはイノベーティブなソリューションでビジネスフィールドに種をまくですう。金田さんのイノベーティブなおチンポがまちきれないんですう！」

フリフリとオレの与えた丈の短いスースカートから彼女自身が選んだ派手な下着がオレを誘う。萌夏の変化に満足したオレは彼女のよくくびれた腰をガツとつかむ。

「ああんっ！」

待ちきれないというように漏れる声。

オレは焦らすようにチンポで萌夏のエロショーツをずらすとマン肉の入り口でツンツンする。しどとに湿った女の蜜がオレのチンポの先走りと混じつてねちよつと粘液の橋がかかる。

「ちゃんとヨガ行つてるみたいだな。いい感じに腰回りの形がオレ好

みにくびれてきてるぜ」

「もちろんです。秘書課のみんなで一緒に行っています。会社のためによりセクシーな体つきになるのは女子社員として当然ですから」

旦那がサビ残をこなしている間にこいつは女子会にフィットネス。まつ、そういう風にオレが誘導したんだけどな。仕事なんてできる奴らにやらせりやあいいんだ。そしてデキル連中にはできないと思い込ませといてさらに働かせる。そのプロフィットをかつさらえれば楽しく生きられるつてもんだ。

オレはそのままオレのためだけに準備された萌夏の肉壺に向かつて腰を進める。柔らかいマン肉にオレの肉棒が食い込みずぶずぶと萌夏の中に埋まっていく。

「んあつはつああああ、キタあ、入つてきてますう。金田さんのお：んんんん：お・チ・ン・ボ！」

「旦那のと比べてどうだあ？」

「あああんん！そ、そんなのお決まりますう。ひやああんん！あ、

あんな自己満足野郎のお…んんあつ…ちつちやいペニスじやあ比ベ物にならないんですう」

ゆっくりと埋め込まれていくオレのチンポ悩ましげに腰をくねらしながら咥えこんでいく萌夏。ぐつちよりとしめつた彼女の秘部がまるで待っていましたとばかりに優しく包み込む。

第六話　三月 教育の季節（2）　..金田視点

オレはいっきに彼女の秘部にオレの一物をぶち込みながら彼女の胸に手を伸ばす。

「ひやああんんん！」

「シャツ越しに揉みしだく。ショーツとそろいのマイクロミニのブラ。始めてみたときから気にいっていた形の良い胸。それがオレの手の中にある。シャツは胸がもみやすいように薄くて柔らかい生地のものを着せてある。何の疑問も抱かずにオレ好みのシャツを自費で揃える萌夏。

「ああ、いいぞ」

そう言つてボタンを一つ外す。普段から第2ボタンまでは外すように『指導』しているおかげでボタンを一つ外すだけで簡単に胸の中に腕を入れられる。

ゆっくりとしたストロークで腰を振りながら乳首をコリコリ弾く。

「ひやあんっ！」

ビクンとオレの腕の中で感じて跳ねる萌夏の体。

「萌夏、もっとバストアップしなよ。いい整形外科紹介するからさ」

「ああんんっ…それってえ、ほ、豊胸ですかあ…んんん」

彼女が内心動搖したのかきゅっとマンコが締まる。それを無視してオレは更に突き上げながら言う。

「ああ、なんか問題あるか。スタイルの維持向上に務めるのは女子社員、つか、オンナとして当然だつて教えたよな」

「んんっ…あああ…そ、そうですけどお…」

案外しぶといな。すでにタトゥーまで入れてんのに今更何に抵抗してんだか。

「へー、そこで向上心ないわけ。オレの所離れてあの自己満足の低能野郎のところに戻るつてわけ？」

そう言つてチンポを浅いところに移動させる。いつでも抜けるんだと

言わんばかりに。

「いやあ、そ、それはいやなお。あの、最低の低能の自己満足野郎のどこなんか絶対戻りたくないです！」

そう言つてマン肉をグイグイ押し付けて少しでもくわえ込もうとする萌夏。

「じやあ会社のためにシリコン入れてその胸を下品なデカチチに改造しろよ」

「しますう、しますから私を見捨てないでください！お願いしますっ！」

腰をくねらせて切羽詰まつてそう叫ぶ萌夏。

「よしよし、それでこそオレの社員だ」

そういうつてぐつと腰を突き上げ。マン肉を掘削する。

「ひやああんんん、か、金田さんのキタああああ！」

嬉しそうにそう叫ぶ萌夏。パンパンつと腰と腰がぶつかり合い限界まで乳首がオレの指の間で勃起する。

「はあんんつあんあんあんあんあん…ひやあつっんんん！」
社長室に響き渡る萌夏の切ない喘ぎ声。オレは彼女を抱きしめながら
その耳元で囁いてやる。

「次の夏から萌夏は課長だよ。無能な旦那の部署の」

「あんっ！ひやあんんん：ありがとうございましゅううう！」

もう、ろれつがまわらないほどに感じていることが見て取れる。オレ
はさらに腰を突き上げて萌夏を責める。

「ほら、もつと感想を聞かせろよ」

「ああんっ！ありがとうございます！んはあつつ、あ、あ
のド低能をお教育する機会をおくだしゃつてえ。ちやんつと、使えるよ
うにい…ひやあんんん…きよ、教育してみしましゅうううう！」

「プライベートミーティングは続けるからな」

「ひやああい！も、もちろんでしゅう！か、金田しやんのおチンポ指
導なしではあ…あんなんあんんつ、ワークライフバランスがあないで
すう！」

んんんああつ、しゅごししゅごいしゅごいいい」

激しくなった腰振りにもうがまんできないというように萌夏が絶叫する。

「ヤバいやばいやばい、イツちやううイツちやうイツちやうううううう！」

萌夏の猥褻な肉が収縮しオレのザーメンをねだる。オレは彼女の胸を強く握りながら、一番奥まで突き上げてそして絶頂する。萌夏の絶頂とオレの絶頂がコンマ2秒で一緒に来る。

「あああああああんんん！」

長く響いた萌夏のよがり超え。力の抜けた彼女の体がオレの腕の中に預けられる。それをギュッとオレは抱きしめる。

「はあはあはあつ：」

ゆっくりと息をオレの腕の中で整えるオレのオンナ。繋がったままの体勢でオレは萌夏を社長のデスクにまるで2人3脚のように連れて行く。動きながらお互いのマンコとチンポがが擦れて感じる。硬さを維持

するオレのチンポ。

「はあはあ、じやあ、課長昇進後の練習のためにプログラムを用意し
といったからな。そつからやつていこうか。ここにメールのドラフトがあ
る。どこ宛か見えるな?」

「あの無能クズ野郎の部署です」

きゅつと彼女のマンコが反応する。まだ内心抵抗があるのかもしれない。
もしかしたら自分のパートナーを罵倒することに興奮し初めててい
るのかもしれない。

「そうだ、そこに送る予定の来月度のターゲットが2種類用意してあ
る。1つは普通のやつ。もう1つは今まで誰も達成しなかった超野心的
な方をだ。こっちを選んだらあの部署は業務過多でパンクするな。お前
の旦那もほぼ家に帰れなくなるってわけだ。次期課長になる萌夏に選ば
せてやる」

『旦那もほぼ家に帰れなくなる』というところでグリグリとチンポを
押し付けてやる。切なげに揺れる萌夏の腰。そしてちょっと考え込む彼

女。だが、それほど深く考えたようではなかつた。ほんの10秒。オレが乳首をクリクリと潰してやれば自分が誰のものなのかを思い出したらしい。

「ひやああんん、後者のほうですううう！」

「いいのか、旦那にそんな過労死するようなことを要求しちゃって」「あんつ！ ごつてえ、本当のジジネスパーソンなつあ常こトツプを

「あんつ！だつてえ、本当のビジネスパーソンなら、常にトップを目指すものでしょ？それにい、過労死するとなったらそれはあの人人の自己管理不足。無能の証つてことじやないですかあ♥」

そう言いながらオレに預けられた彼女の体が更に深く快感を貪ろうとする。

「ほら、自分で添付ファイルをつけて送れ」

そう乳首を引っ張りながら命令する。

ひやあい!

そう、気持ちよさそうに萌夏は恍惚の表情で言つて。パソコンを淡々と操作する。その彼女の顔には先輩を慕つて入社した頃の彼女の面影はな

く、秘書課の他のメス同様にオレ以外の全てを軽蔑し、それ以外の全てを憎む表情が浮かんでいた。

「はあん、じれつたいい。あの人もこんなところまで邪魔しなくてもいいのに。じやあ、送りますね」

「ああ、旦那が忙しくて帰宅できなくなつたらオレのマンションに住まないか？秘書課の他の連中みたいに愛人としてさ」

「ああん、それいいですぅ♥ぜひともお願ひしますう」

メールが送信完了したのを見計らつて腰を背後から一気に打ち込む。

「ああんつ♥あの無能と大違ひのプロダクティビティあふれるおチンポが入つてますうう」

萌夏のデカチチを覆う存分堪能しながらパンパンツとリズミカルに腰を振る。嬉しそうに萌夏の体が揺れて、マンコが収縮を繰り返す。抜き差しする度にラブジュースがヌチャヌチャと音を立てて社長室の床に溢れる。

「どうだ、オレの存在感は？」

「そう腰を振りながら聞く。

「あつん、あつ、圧倒的ですう。金田さんのおんはあんん、パワフルなあおチンポお、リスクベクトしてますうう！…あんん、ふああああん！」

「旦那と比べてどうだ」

「そう再び聞くと更に興奮したのか締め付けがややきつくなる。

「ああんん！そんのにお、ひやあん、比べられないですうう。比べられないくらい…ひやあんん、あんあんあん、金田さんがすごすぎるんですううううう」

「おお、締まってきた。とりあえず一発行くぞ」

「ふあああんん、わ、私もイキそうですう。あああんんしゅごいしゅごいふかいいいい！」

オレの腰の動きに合わせて尻を押し付けてくる萌夏。オレは彼女の奥深くで絶頂した。

「はあんん、使つてくださいてえ、ありがとうございますう」

ちゃんと教育したとおり萌夏がお礼を言う。

「とりあえず、前菜は終わりかな。このあとオレのマンションに行つて秘書課のみんなでお前の旦那の業績評価を決めようぜ」

そう言いながらチンポを抜き出す。

「ああん：」

切なさうに声を上げる萌夏。

「あんなダメチンポの評価なんか最低でいいんです」

旦那の業績評価をあげるために体を許したメスが快楽に溺れて本末転倒なことを言つてやがる。そして彼女はその場でひざまずくと丁寧にオレのチンポからゴムを外すとゴムの口を縛つて自分のマンコの中に入れる。オレが教えてやつた緊張しないお守りだ。どこにいようとオレのものだつて自覚を忘れないようにな。

じゅるちゅる…ちゅぱっと萌夏が口でオレのチンポをクリーンアップする事後処理までできてやつと一人前だからな。尿道口までピンクの可愛らしい舌でブラッsingしたあとでハンカチで全て拭き取つてオレ

のお気に入りの香水をシュッとかける。そして、彼女自信のマンコにも今しがた使用済みゴムをくわえ込んだマンコに同じ香りをふりかける。そして名残惜しそうにオレの下着とズボンを丁寧に引き上げる。

「レクチャーありがとうございます。金田さん♥

じゃあ行きましょうか！」

そういうつて豊胸済みのデカパイをオレに押し付けながらメスの香りを漂わせてエスコートしてくる。すっかりオレの色に染まつた桑原萌夏。このあともオレの性奴隸として他のメスたちと穴を並べておねだりするんだろう。そしてそれによつて自己満足的なできるΩ像を自分に投影していく。結局コイツも旦那と同じ自己満足なメス便器つてわけだ。

あとがき

今回は『染められてしまつた嫁、気づかなかつた僕。』をお手にとつて
くださり大変ありがとうございます。サークル活動はリアルの方でじた
ごたがあつたものの皆様のお陰でなんとか継続できていますし、こうし
て新しいジャンルに一步を踏み出すこともできました。今回の作品が皆
様のムスコに響けば幸いです。

今回もアンケートを用意しました。またアンケートにそつて後日
談をブログに例によつて投稿しようと思つていますのでほんの 2 分ほ
どのものですので答えていただければ大変ありがたいです。

アンケート URL

[https://creativesurvey.com/ng/reply/cb9ad10192ebe369896d8008378
564/](https://creativesurvey.com/ng/reply/cb9ad10192ebe369896d8008378564/)

ブログ

<http://b.dlsite.net/RG30970/>

また小説の過去作もいの機会に手にとったただければこれにまわる喜びはありません。

http://b.dlsite.net/RG30970/archives/cat_465697.html

それでは今後とも皆さんのマスクと末永くお付き合いでありますことを祈っています。